

民主化への動き

フランスのナントは、アンリ 4 世が發布した「ナントの勅令」(1598 年)で有名なところで、世界史では必ず出てくる地名である。しかしこのナントが、実は大西洋奴隷貿易が進められるなかで、フランスの奴隷船の寄港地として発展した都市であることは日本では知られていないのではないだろうか。

ナントから少し西側のロワール川河口付近に、ラ・ボール (la Baule) というきれいな海岸線を有した、ブルターニュ地方で大変人気のリゾート地がある。1990 年 6 月 20 日、そこで 16 回目となる「フランスーアフリカ首脳会議」が開催され、アフリカから 37 カ国が参加した。当時のフランス大統領はフランソワ・ミッテラン。集まった首脳たちを前にして彼が訴えたのが、アフリカの民主化だった。そしてこの時の演説が、90 年代のアフリカの政治の方向性の転機となったのである。

1989 年 11 月、ベルリンの壁が壊されたことをきっかけに、共産主義社会の崩壊が始まった。この出来事はヨーロッパとアフリカの関係にも大きな影響を及ぼした。とくに植民地の宗主国から脱却して、共産主義に傾倒していったサハラ以南のアフリカ諸国にとって、ソ連という大きな後ろ盾をなくしたことは大きな問題だった。慢性的な経済停滞にあえぐアフリカ諸国にとって死活問題でもあっただろう。その一方で、フランスにとってこの状況は、アフリカの旧植民地における存在感を取り戻す好機でもあった。ミッテラン大統領は、アフリカの首脳たちに次のように訴えた。

民主主義といえば、その要素は代表制や自由選挙、複数政党制、言論の自由、法の独立、検閲の拒否である。

自由な国民よ、私が敬意を表するアフリカの独立国よ、自分たちでそれぞれの道を選び、そしてその歩みを踏み出すことを定めるのはあなたたち自身なのだ。

彼の演説は国の自決権を尊重しながらも、国民選挙もない一党独裁政治体制を全面的に否定し、民主主義へ誘うものだった。そして、アフリカの民主化をより決定的にするために、経済援助をちらつかせていたことも重要なポイントである。実際、彼は演説のなかで「より自由な方向へ向かっていくために努力するなら、フランスは支援への尽力を惜しまない。アフリカの国々に対してフランスが援助するのは当然のことであるが、その援助は独裁的な振る舞いをする人々に対しては冷めたものとなり、勇気をもって民主化へ向かう歩みを進める人々に対してはより熱いものとなるだろう」と続けた。独裁政治を進めてきたアフリカの首脳たちは、この「要求」を受け入れる以外の選択肢がなかったと言えるだろう。

こうして 90 年代、アフリカの多くの国が民主化へと方向転換していくことになる。共産主義を標榜していたコンゴももちろん例外ではなかった。ただ、その後には辿っていくことになるコンゴの歴史を見れば、それは国が混乱する序章にしか過ぎなかったと見ることもできよう。

ラ・ボールの演説を受けてコンゴでは 1990 年 12 月、単独政党であったコンゴ労働党が民主化に移行することを決定した。そのための暫定的な政治体制を敷き、複数政党制を宣言、そして国民議会選挙を 1992 年 3 月に開催することを決定した。

その準備段階として 1991 年 2 月から 6 月にかけて、最高国民会議 (la Conférence nationale souveraine) が招集された。約 1,000 を超える政党や政治結社が一堂に会した会議で、まず「最高国民会議」自体が承認され、新たに暫定的な長としてイエズス会派のコンボ司教 (Mgr Ernest Kombo) が選出された。4 カ月にわたる会議のなかで、これまでの国のさまざまな出来事や政治のあり方などに対する批判がなされた。大統領暗殺やクーデター、政治犯の扱いなどそれまでは公言できなかったことが公の場で議論された。そして独裁体制時の憲法を破棄することを決定した。6 月には新たな憲法によって複数政党制の導入を決めていった。また、アンドレ・ミロンゴ (André Milongo) が暫定的ではあるが、実質的な首相に選出された。彼はフランスの国立行政院出身のエリート官僚で、世界銀行にも勤めた国際派である。

軍もこの民主化への移行を支持しており、「軍は一つの政党や個人を支持するのではない」との声明を出し、行政への関与を否定した。ただ、こうした姿勢を懐疑的に見る人たちも少なくなかったようだ。これまで政治体制と緊密な関係にあったことだけでなく、将校はサス＝ンゲソ大統領と同じく北部出身の部族で占められていたので、そのほとんどが南部出身で構成されていた暫定政権にとっては憂慮すべき問題でもあった。

実際に 1991 年 6 月にはクーデターの噂が広がった。首相の周辺では軍にその関与の疑いがあるとみなし、首相はコンゴ労働党寄りの将校たちの一掃を試みるが、軍と対立することとなり、協議の結果、新たな政治体制が組まれるまでは、こうした軍の「掃除」は行わないことで一致した。

民主化への移行のなかで山場となったのが、新憲法承認の国民投票である。ただ、新憲法が承認されることには大きな問題はなかった。なぜならすべての党派がすでに賛成を表明していたからである。それよりもむしろ、投票のシステムを構築することが大変な作業だった。また、さまざまな党派が誕生したが、政治理念ではなく部族的な集まりという色彩が強かったことも懸念される材料だった。

国民投票の投票率は 70%。大きな混乱もなく投票は行われた。結果は 96% の支持を得て、新しい憲法は承認された。コンゴ独立以来 6 番目となる憲法の制定である。こうして民主選挙がよいよ実施されていくことになった。

現在、奴隷の拠点であったナントでは、ブルターニュ公爵城 (Château des ducs de Bretagne) が博物館となり、奴隷貿易に関する展示が行われている。また、2012 年には奴隷制廃止を記念したモニュメントが完成した。2,000 枚のプレートで三角貿易の様子が説明されている。今年 5 月 10 日には、仏領ギアナ選出の議員によって提案された「奴隷貿易・奴隷制および奴隷制廃止の日」の制定 20 周年を祝う催しがあり、モニュメントがあるパリ市内の公園でマクロン大統領も出席して式典が行われた。昨年のアメリカでの黒人差別事件以降、ヨーロッパでは奴隷貿易など過去を見直す動きは多く見られるが、このラ・ボールでのフランス大統領の演説も、アフリカの民主化を決定的にしたという点では歴史に残る出来事だったと言えるだろう。その結果として、急速に民主化が進められたことも、いずれまた再考すべき出来事であるのかもしれない。